

沖縄市室川貝塚第一次発掘調査速報

高宮 廣衛 比嘉 賀盛

(一) はじめに

室川貝塚は沖縄市字仲宗根室川原88および130の両番地にまたがって所在する。この貝塚は1974年4月、当山一博君（当時越来中学校3年）によって発見され、同君の表採資料により、荻堂式、類市来式、大山式、カヤウチバンタ式、宇佐浜式等の土器を含む前期から中期初頭におよぶ遺跡であることが分った。

遺跡周辺の地形は写真（図版1遠景）に見るように、南西側は石灰岩台地の形成する5～6m.の断崖が迫り、台地上の沖縄市役所と下方の室川団地に挟まれた斜面に室川貝塚は立地している。標高は約95m.、太平洋岸までの直線距離は約25kmで東方約200m.の台地東端崖下には同じく前期に属する仲宗根貝塚がある。また、後背のこの崖面に沿って湧泉が数箇所あり、戦前は崖下斜面下方に広がる水田への主要な水源になっていたようである。

ところで数年前、遺跡の立地する斜面に駐車場がつくられることになり、整地作業が始まった。この作業が遺跡発見の切掛けとなったわけだが、斜面が駐車場に不適なところから造成工事は途中で中止となった。この工事で遺跡の北西部は削り取られ、採土後の凹地には暗褐色の遺物包含層が露呈していた。露呈部の状況から残存層は40～50cm.くらいかとみられた。しかし、降雨の度に浸蝕を受け、その都度新らしい遺物が地表に現われた。今回は遺物の保存と遺跡の範囲確認を主目的として発掘調査を行なった。

第一次調査は1974年12月26日から翌年の1月5日までの11日間実施したが、途中雨に祟られ予定の範囲を終了することができなかった。そこで、1975年7月8日から同月18日にかけて第二次の調

査を行い、後述のMトレンチ（2×12m.）については一応調査を終了した。しかし、Sトレンチは予想以上に深く、上部の二層を調査しただけで、三層以下は第三次調査にもち越すことになった。

現在、Mトレンチ出土の過去二回にわたる資料を整理中で、前回のものと接合できる土器資料があり、接合作業を急いでいるが、終了次第報告書を作成する予定である。しかし、第一次調査で得た土器には有文資料が豊富で、中には奄美諸島の鬼界島で初めて注意に上った「赤連系^(註1)」と称される縄文系の土器資料も若干含まれ、そのため関係者の要望も強く、とりあえず予報として第一次調査の出土遺物を写真で紹介することにした。

なお、第一次調査に際しては沖縄市教育委員会の山城清輝委員長、砂川玄依課長、棚原敏雄係長、県教育庁文化課専門員の知念勇、安里嗣淳、金武正紀、当真嗣一各氏のほか本学4年次の比嘉春美、岸本義彦、宮城利旭、中村愿、山田正、吉本直子、上原静の諸君の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

(二) 調査経過

発掘調査はまず採土後の包含層露呈部から着手した。包含層は東北側に傾斜し、西側では台地上の沖縄市役所から下方の団地に通ずる砂利道の近くで切れ、東北側は室川団地に面する崖面の西方数米の箇所まで終っている。したがって、未攪乱層が残っているとすれば、西南および東南部の地域ということになる。

以上の状況および今回の調査目的によって、まず包含層露呈部のほぼ中央に、斜面の傾斜にそって2×12m.のMトレンチ（写真1）を設定し、これを6ピットに分け、下方（東北側）より上方

(南西側)に向って、1・2・3・・・6の番号を付し、1・2・4・6の4ピットから発掘を開始したが、3・5の両ピットは時間の都合上、第二次調査に持ち越した。

Mトレンチ設定の箇所は前にも記したように表土および包含層上部の削り取られた場所で、浅い箇所では20cm.、深い箇所では60cm.の暗褐色土層が見られ、続いて3~10cm.の黄褐色の移行層があり、そしてマーザの地山となる。調査は10cm.を単位として掘り下げたが、貝層は見当らず、その点では中期遺跡に共通する特徴を有し、「貝塚」の名は相応しくないと考えられたが、後述のSトレンチでは貝層を認めたので、従来の室川貝塚の名を使用することにした。

ところで、遺跡東南部の状況を確認するため、ピットM-5の東南方延長上にテスト・ピット(S-5)を設け試掘を行ったところ、一部に混貝層の存することを確認した。この混貝層はピット西半にみられ、遺跡の東南部には混貝層の存することが分り、第二次調査はSトレンチ(写真1)を中心に行うことになった。テスト・ピット(S-5)における層序は、第I層・混土礫層、第II層暗褐色土層、第III層・混土貝層、第IV層は地山への移行層で、黄褐色の混土礫層である。

(三) 出土遺物

第一次調査の出土遺物は人工遺物と自然遺物に分けられる。自然遺物はMトレンチにおいては魚獣骨に限られ、貝類は皆無の状態であった。しかし、Sトレンチのテスト・ピット(S-5)ではアラスジケマンガイを主体とする混土貝層がみられた。人工遺物には貝器、骨器、石器、土器があるが、貝器、骨器の出土量は少なかった。今回は人工遺物のみ紹介する。

貝 製 品

貝製品は第3図1~5に示す5個で、すべてピットS-5第III層(混土貝層)の出土である。

同図1~3はシャコガイやリュウキュウザルボウの頭頂部に粗孔を設けた貝錘と見られるもので、1と2は第III層20~30cm.レベル、3は30~40cm.レ

ベルの出土である。

4は同層20~30cm.レベルの出土で、アコヤガイに小孔をあけたものであるが、破損が著しく全景は不明である。

5も20~30cm.レベルの出土で、アコヤガイと見られる貝を棒状に加工したもので、一部に研磨痕を有するが、用途は不明である。

骨 製 品

第3図6~11の6個で、大部分は装飾品と考えられるものである。

6はサメの歯(イタチザメ類、*Galeocerda* Sp.)の骨質部に2孔を穿ったもので、ペンダントと見られ、類例は識名貝塚^(註2)で知られている。

7は破損品で上記6とは別種のサメの歯に孔を穿ったもので、同様の製品は第二次調査でも数個の発見があった。6・7ともにピットM-6第II層の出土で、6は20~30cm.レベル、7は40~50cm.レベルの出土である。

8は周縁部を研磨した獣骨の破片で、下端部は欠損している。ピットM-4第II層30~40cm.レベルの出土である。

9は扁平な助骨の両縁に刻目を密に施す骨製品で、一端は尖り、他端は破損しているが、この破損部に穿孔の一部が残っている。ピットM-6第II層40~50cm.の出土で、この種の製品は崎樋川貝塚^(註3)でも出土例があり、「鋸歯状刀子」の名が付されている。

10と11はイノシシの牙に小孔を設けたもので、10はピットS-5第III層20~30cm.レベル、11はピットM-4第II層30~40cm.レベルの出土で、いずれも破損品である。

石 器

石器は56個の発見があったが、そのうち用途や器形の判明するのは22個で、他は研磨痕を有する破片であるが、後者の中には磨り石の破片かと見られるものもある。用途の判明するものについて記すと、磨製石斧(半磨製を含む)15個、打製石斧1個、ノミ形石斧2個、凹石3個、砥石1個の計22個で、大部分は破損品である。今回はそのうち11個を第2図に示した。上記石器の石質は未同

定であり、次回に報告したい。

石 斧

石斧には前述のように磨製と打製の2種がある。磨製石斧は半磨製も含めて15個の発見があったが、そのうち破片の大きいもの10個を第2図1～10に示した。

1は磨製石斧の破損したものを再度加工利用したもので、写真に見られるように一面(左)は研磨が全面にわたってみられるが、他面(右)は刃部のみ研磨を施し、縁端部は破損のまま放置されている。ピットM—2第1層(表土)の出土である。

2はピットS—5第1層(攪乱部)の出土で、完形に近いが研磨は徹底せず打欠痕を大部分残している。

3はピットM—6第II層20～30cmレベル出土の蛤刃石斧の破片である。

4はピットM—1第1層(攪乱)出土の石斧の頭部破片である。

5も石斧の頭部破片で、出土層位は上記4と同じ。

6は両刃の刃部破片で、ピットS—5第1層の出土。

7も両刃の刃部破片で、ピットM—4第III層30～40cmレベルの出土。

8・9はノミ形石斧に属するもので、8(S—5第I層)は図の上方が刃で、片刃的両刃である。9は刃部を欠損する。

10は唯一の打製石斧で表採品である。製作は雑で、伊波貝塚でも類例の報告がある。^(註4)

凹 石

3個のうち1個を第2図11に示した。この標品(S—5第I層)は大分破損しているが、一面の中央部には浅い凹みがみられる。他面は破損のため凹みの有無は不明。他の2個のうち1個は両面に凹みを有し、残りの1個は一面のみに凹みが認められるもので、詳細は本報告に記載したい。

砥 石

ピットS—5第III層で1個の出土があった。

土 器

小規模の発掘にもかかわらず多数の土器が出土

し、内容も多彩で前期の萩堂式から中期の無文肥厚口縁土器に及んでいる。又、本貝塚では沖縄の伝統的な文様を有する土器以外に爪形文等の奄美的な土器や鬼界島赤連町出土の縄文系と見られる「赤連系」の土器などが若干発見され、表面採集では市来式土器の影響を受けたと見られる土器が得られている。しかしながら土器のほとんどが小破片で、総数にして3400個を出土しているが、器形や文様構成の明らかな資料は少ない。口縁部は253個(無文33個、有文228個、不明2個)得られた。口縁部の形態は平口縁と山形口縁がある。器形の推定可能なものについて見ると甕形ないし深鉢形を呈すると見られ、壺形やその他の器形は見られない。底部は76個(平底61個、丸底1個、不明14個)得られた。

出土した土器を熱田原貝塚の土器の分類と対応させるとI～III類の他に口縁部の肥厚する宇座浜式^(註6)やカヤウチバンタ式^(註6)等の肥厚口縁土器があり、これを第IV類とし、本貝塚の土器を4類に大別した。

第I類 この類の土器は熱田原貝塚と同様に口縁の山形突起部の肥厚しないものや萩堂貝塚、嘉手納貝塚に見られる山形突起部の肥厚したものがある。突起部の肥厚したものとしては図版4の50、図版9の44、図版11の21、図版7の23等で後者(図版7の23)は竹管による施文である。山形突起部の肥厚しないものは図版5の11・28・56、図版6の8・9・40・65・66・67、図版7の1・18・19、図版8の1・26・53、図版9の4・45、図版10の18、図版12の17等である。以上の他に図版4の51・52のように凸帯文を有する土器があり、図版3の20もこの類と見られる。^(註5)

第II類 第II類土器には大別して2種が含まれる。すなわち器形は山形口縁の消失した平底の甕形ないしは深鉢形土器(第III類)の器形に叉状工具で施文するものと、他は山形口縁を有する第I類土器の器形に単篋工具で施文したものである。前者に含まれると見られるものは図版5の51の1例のみで、他はすべて後者に属する。単篋による文様をもつものは図版8の26、図版10の44である。

その他に口縁が山形になると見られるものには図版7の30・31・45等がある。竹管による文様をもつものは図版5の27等がある。

第Ⅲ類 平口縁・平底の甕形ないし深鉢形の器形に単篋工具で施文するもので、図版9の25と図版10の12の2個はこれに属する。やや大きな口縁破片である。

以上の他に無文土器で器形上、上記のⅠ類あるいはⅢ類に分類されるものがある。図版8の65は口縁部が山形となり器形はⅠ類に属する。

図版4の44、図版6の5・6等は口縁部の肥厚が見られない点でⅠ類あるいはⅢ類の器形に属すると見られる。

尚、図版6の5は凸帯を有する点が他の土器と異なり、図版6の6は口縁部が強く外反する点で他の土器と器形が異なる様である。

第Ⅳ類 口縁部の肥厚する土器をまとめたが、数型式が含まれる。カヤウチバンタ式は、図版4の41、図版6の58、図版7の17、図版11の42、図版12の25等がある。宇座浜式は、図版1の1、図版3の28、図版6の57、図版11の43がある。以上の他に口縁部が外反し、一見肥厚している様な形状を呈する図版1の3、図版7の32、図版9の34、口縁部がほぼ丸く肥厚する図版4の42・43等があり、図版12の26は、口縁部が外反し、肥厚部の断面は丸く、下方に凸帯を1条圍繞する。

奄美的文様を有する土器には数種がある。面縄東洞式と見られるものは図版9の43で、図版6の56は東洞式もしくは嘉徳Ⅰ式に属するものであろう。面縄前庭式と見られるものは図版8の27で図版5の24・49、図版7の36等もこれに類するものであろう。その他の奄美的土器としては図版4の27、図版7の37、図版11の62等がある。以上の土器とⅠ～Ⅳ類の沖縄の土器との共伴関係は不明であるが、出土層位についてみると、Mトレンチに於いては、1個(40～50cm)を除き、すべて20～30cm.レベル以上の出土である。

赤連系の土器は図版6の29、図版10の52、53、図版12の29・32・33・39等に示したもので、器厚が10～12mm.前後と厚く、図版10の52には貝殻文と

見られる文様が施されているが、他は篋による文様である。

類市来式土器は、^(註1)図版1の4の土器で当山一博君が表面採集で得たものである。文様は叉状の工具によって施されているが、裏面は無文である。

(四) 結 語

以上、第一次調査の出土遺物を簡単に紹介した第二次調査は1975年7月7日から同月18日までの12日間実施し、Mトレンチでは3と5の2ピットSトレンチでは6～9の4ピットの発掘調査を行い、Mトレンチについては一応予定の範囲を終了した。

第二次調査によってMトレンチでは前回のものと接合可能な土器片を若干追加することができ、現在接合作業を急いでいるが、これによって、文様の展開状況や器形の判明する資料が僅かではあるが増加した。Mトレンチについては先述のように一応の調査を終えたので、今年度中に報告書を作成する予定である。

土器についてみると、Mトレンチでは沖縄の前期土器が主体をなし、奄美の土器や赤連系の土器が若干混って発見されたが、沖縄諸島のどの土器に共伴するかは確認できなかった。これについてはSトレンチの層序に期待している。

Sトレンチにおいては第一次調査の際、S—5のテスト・ピットで混土貝層の一部を確認した。そこで第二次調査ではS—5以南の6～9の4ピットで調査を行った結果、良好な層序の存することが分った。しかし、今回は時間の都合上、表層から第2層までの調査を実施しただけで、下部に到達することができなかった。下層の残部は第三次調査で行う予定で、Sトレンチについては第三次調査終了後に報告書をまとめることにする。

註

(1) 河口貞徳 「奄美に於ける土器文化の編年について」 鹿児島考古 9 号、鹿児島考古学会、1974。

(2) 賀川光夫・多和田真淳、「沖縄宜野湾村大山貝塚調査概要」文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1960。

(3) 島田貞彦 「琉球崎樋川貝塚」歴史と地理、1932。

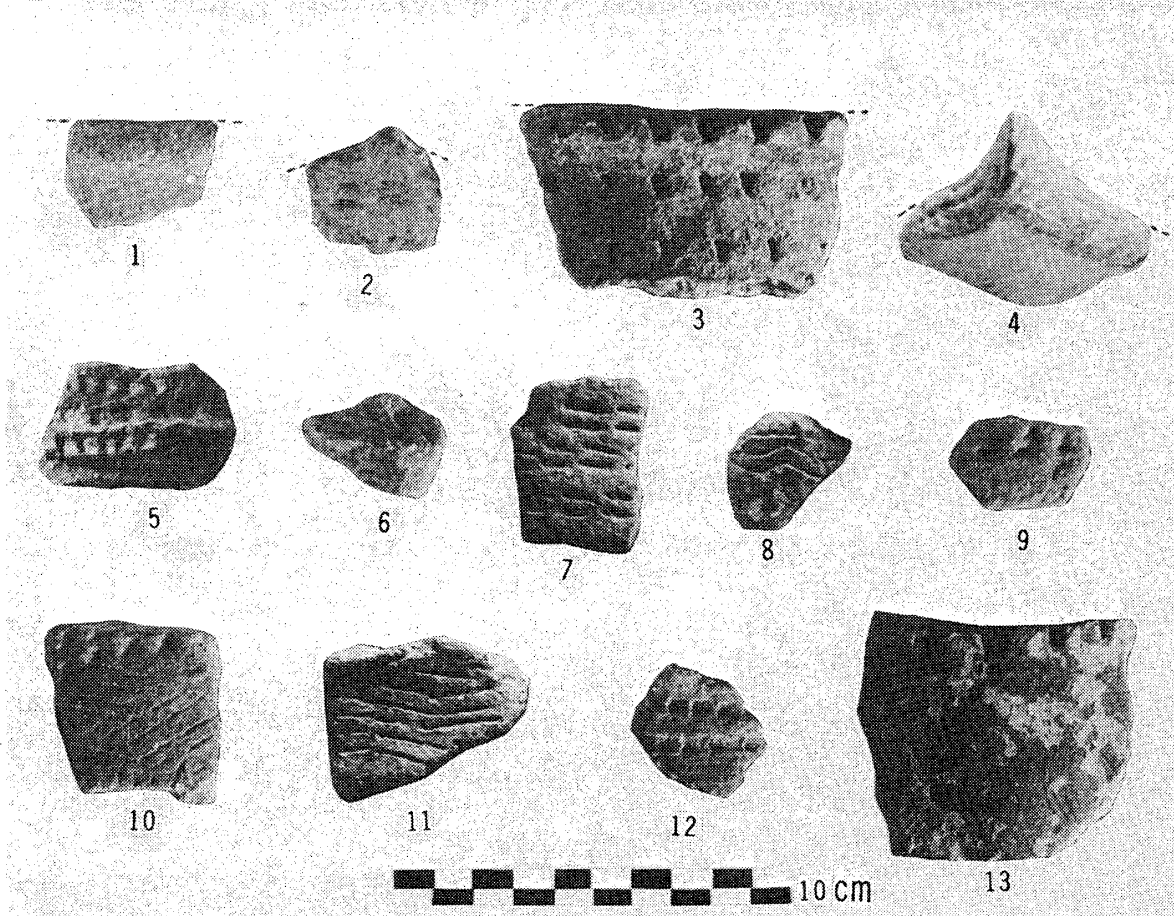
(4) 大山柏、「琉球伊波貝塚発掘報告」1921。

(5) 高宮広衛・C. W. MEIGHAN「熱田原貝塚の土器」沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇第 I 巻 1 号、1973。

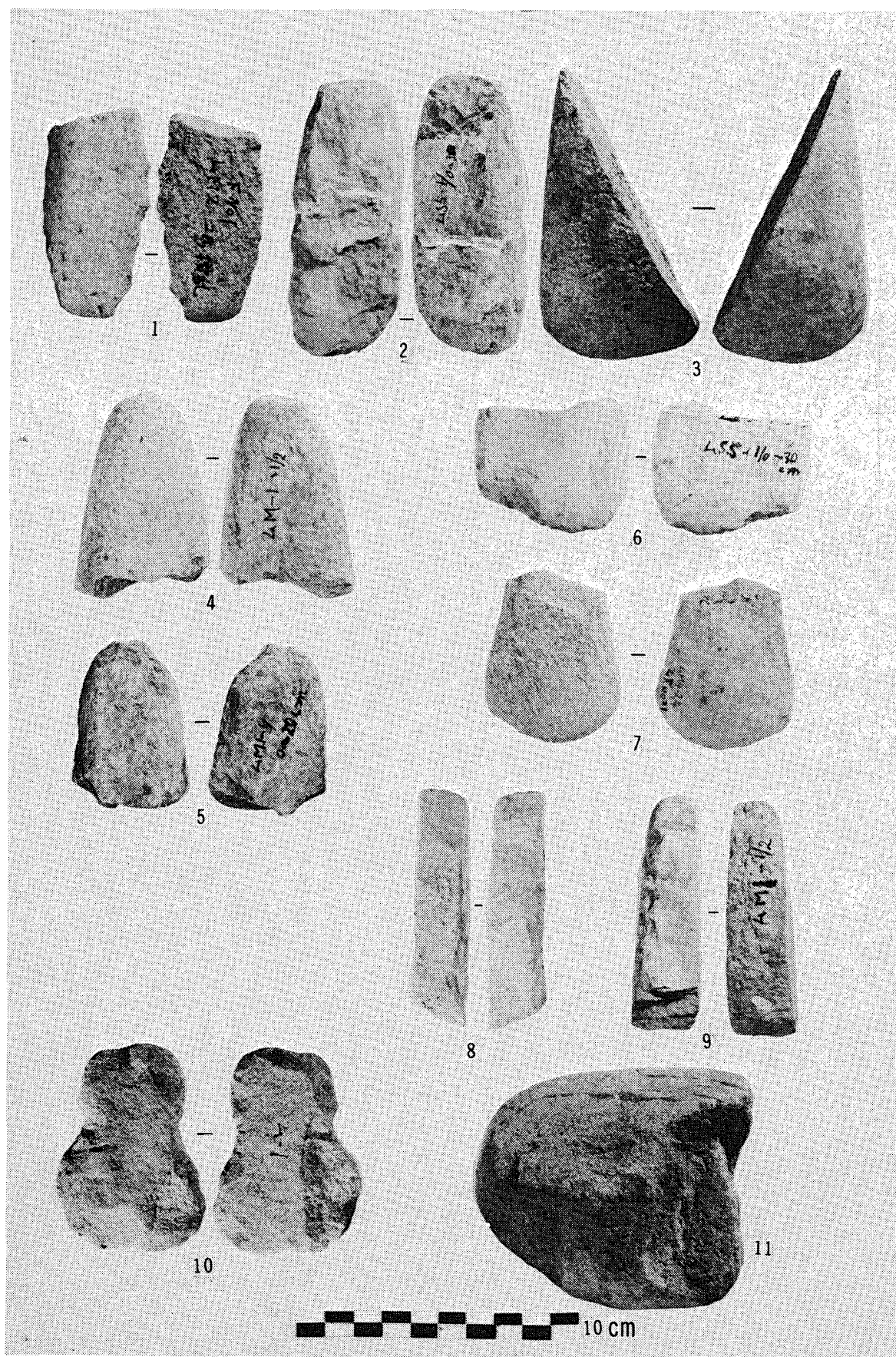
(6) 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1956。

(7) 松村瞭 「琉球荻堂貝塚」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告、第三編 1919。

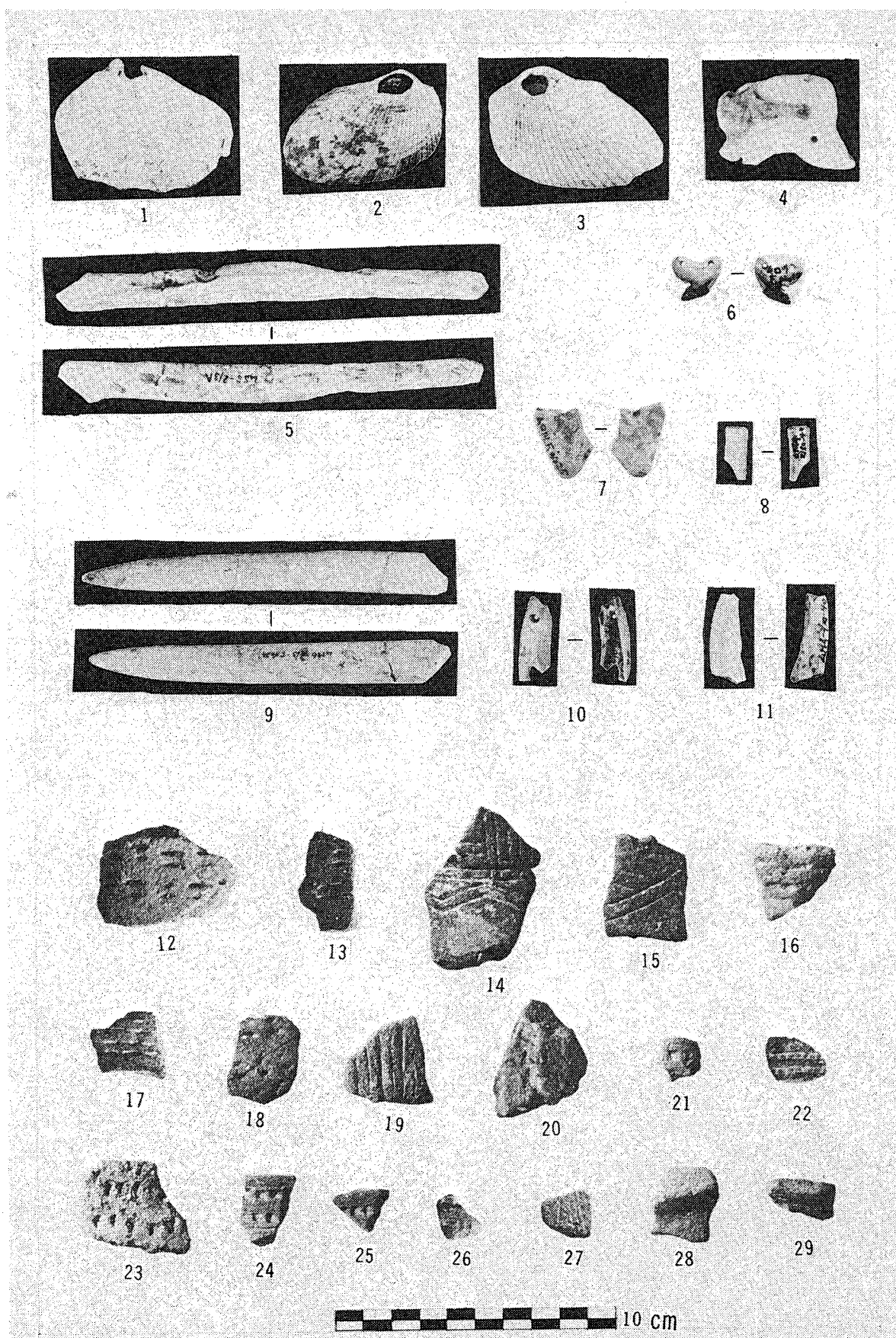
(8) 新田重清・嵩元政秀 「嘉手納貝塚発掘報告」文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1960。



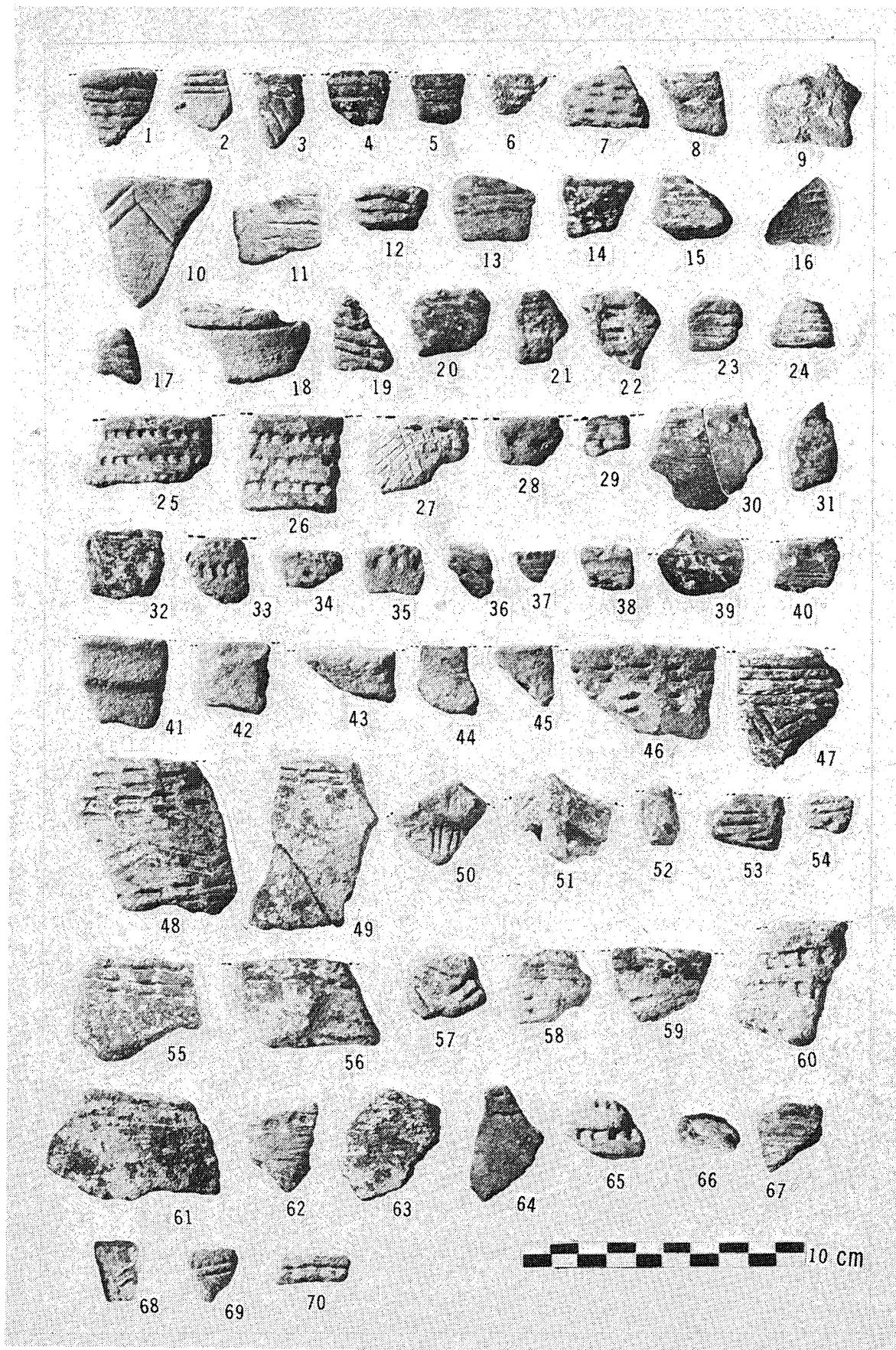
図版 1 貝塚の遠景と表採資料



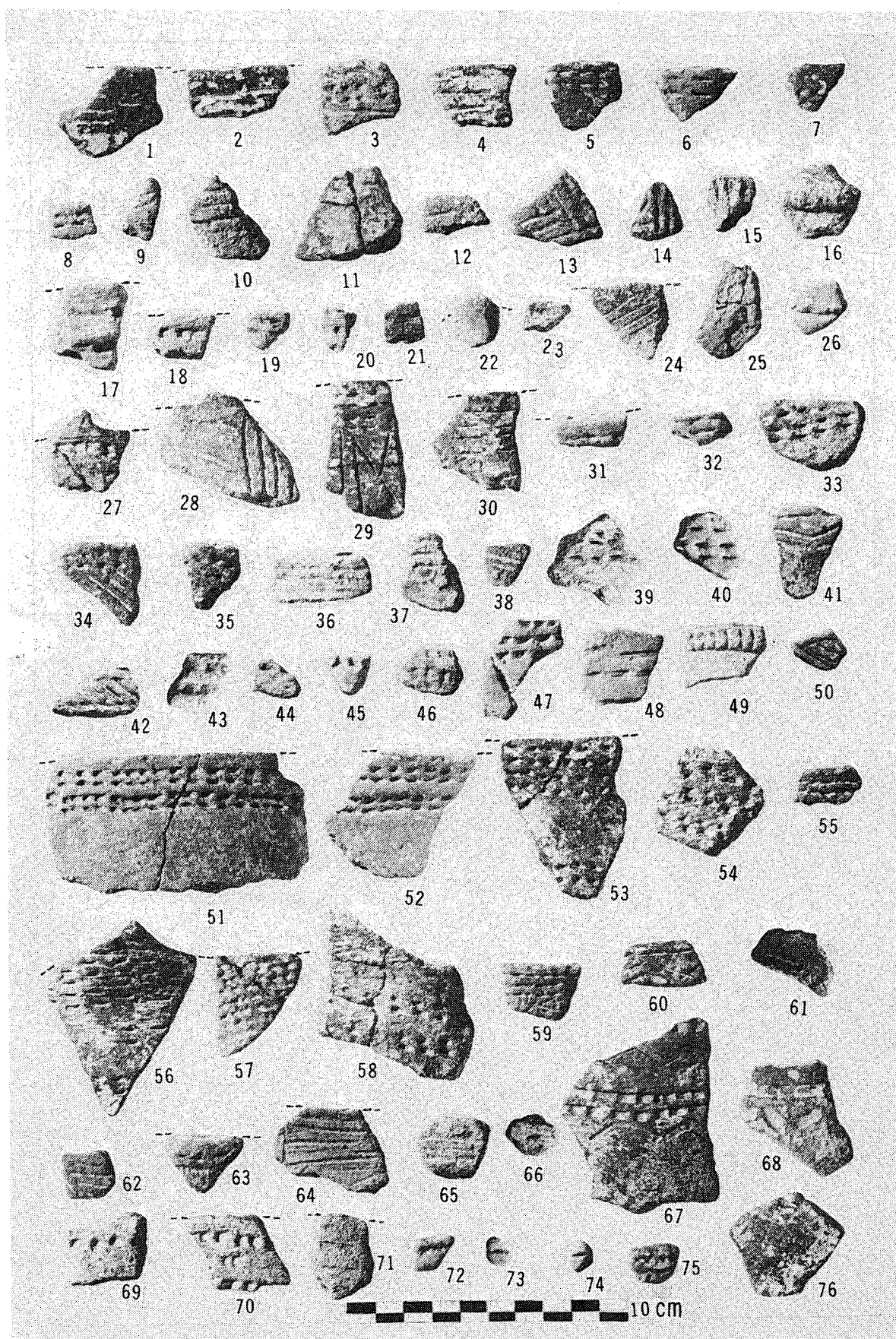
図版 2 石器



図版 3 貝製品・骨製品および表面採集土器

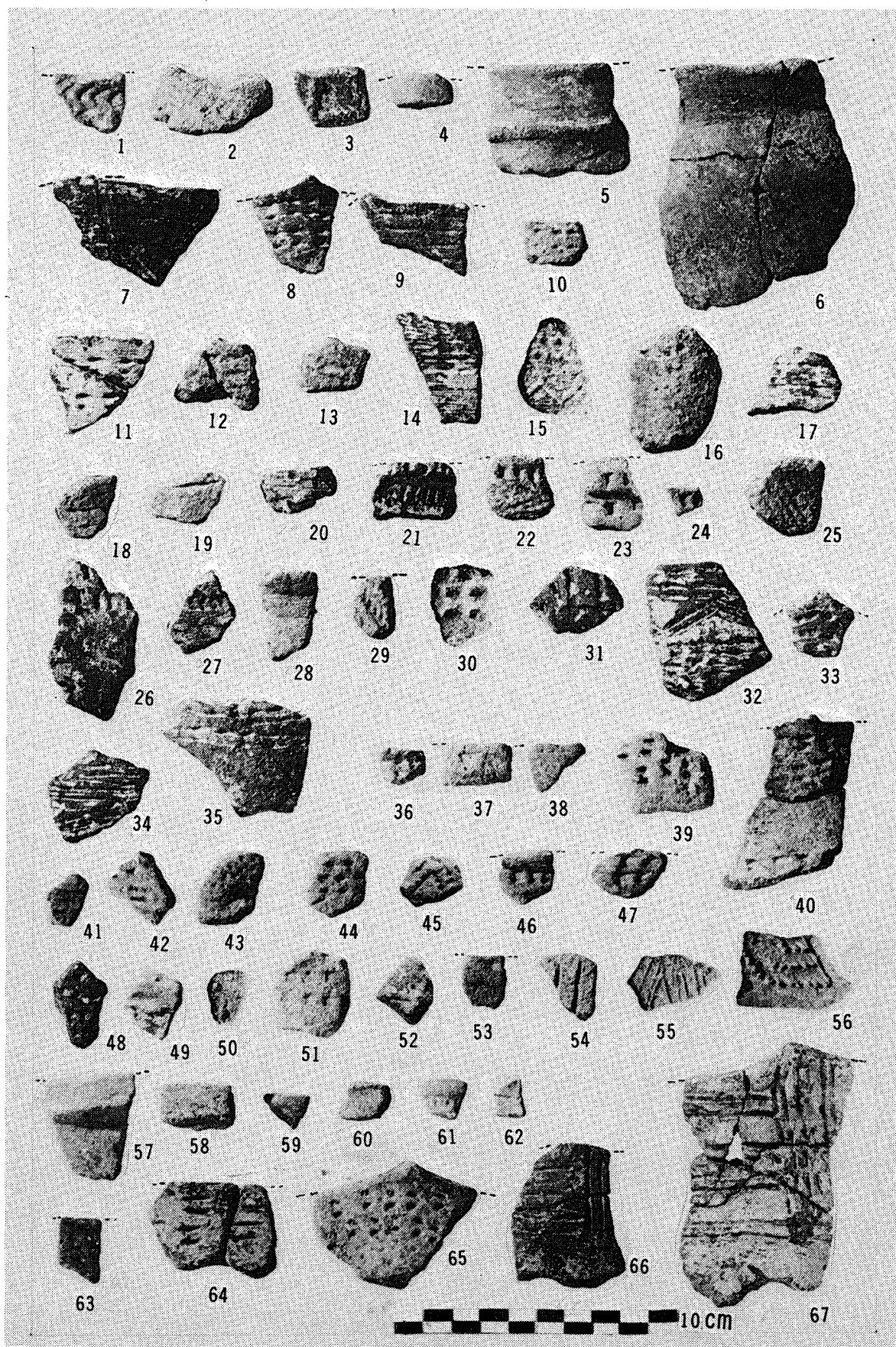


図版4 ピットM-1
 [II層 0 ~ 20cm (1 ~ 47)、20 ~ 40cm (48 ~ 70)]



図版 5 ピットM-2

〔I層(1~26)、II層0~10cm(27~50)、10~20cm(51~76)〕

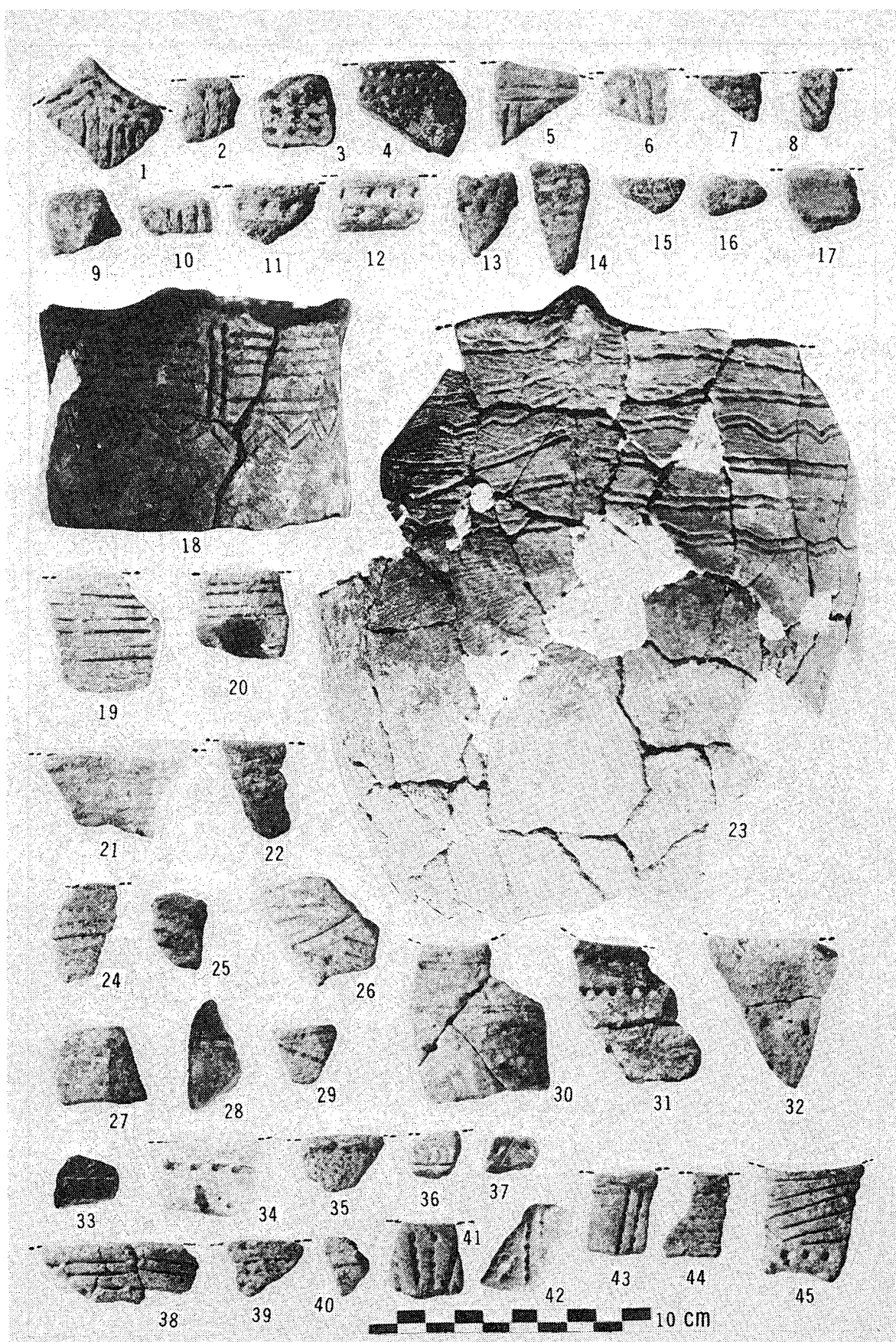


図版 6 ピットM-2

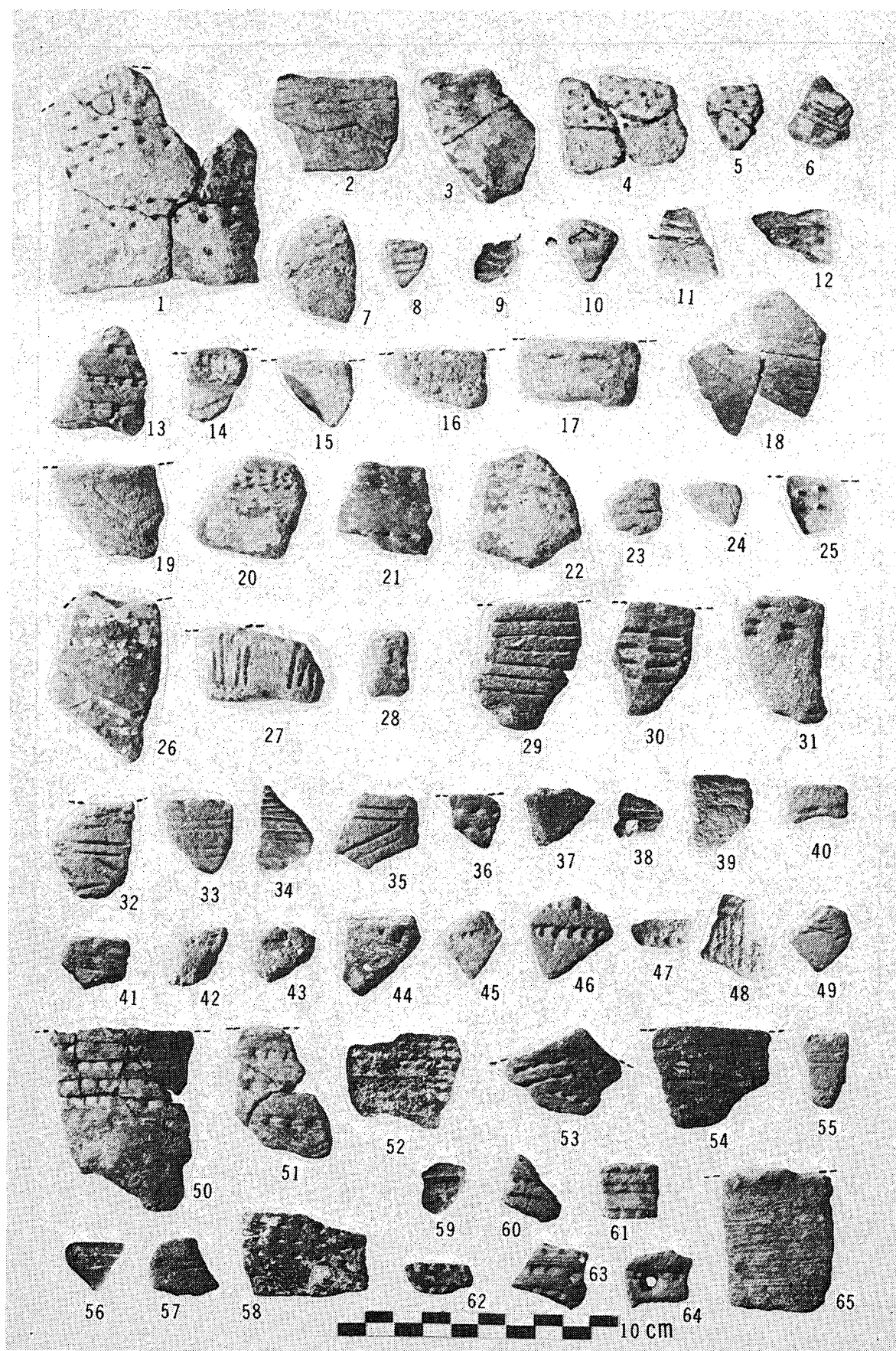
〔II層10~20cm(1~6)、20~40cm(7~31)、III層0~10cm(32~35)〕

ピットM-4

〔I層(36~38)、II層0~10cm(39~62)、10~20cm(63~67)〕



図版7 ピットM-4
〔 II層20~30cm(1~32)、30~40cm(38~45) 〕

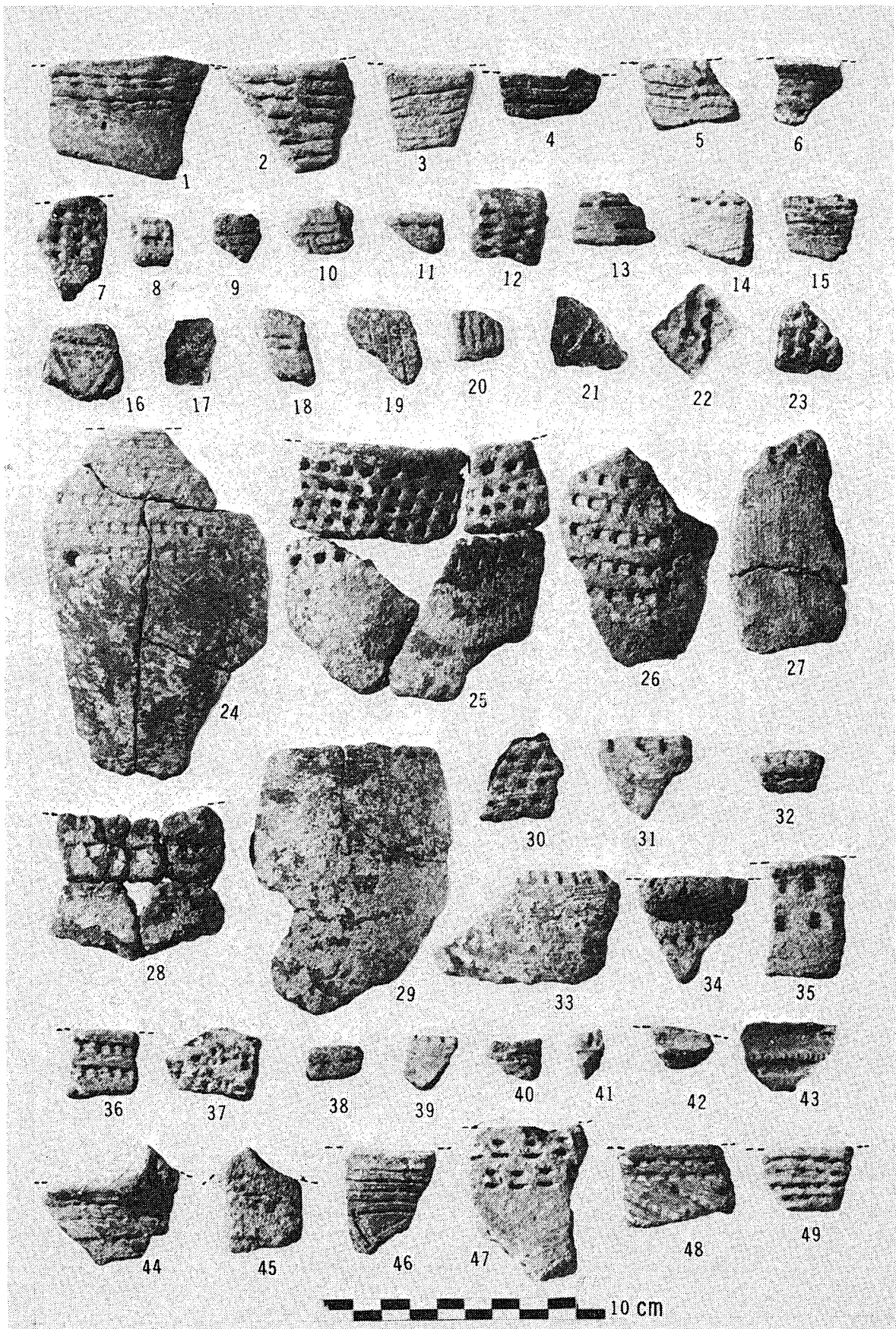


図版 8 ピットM-4

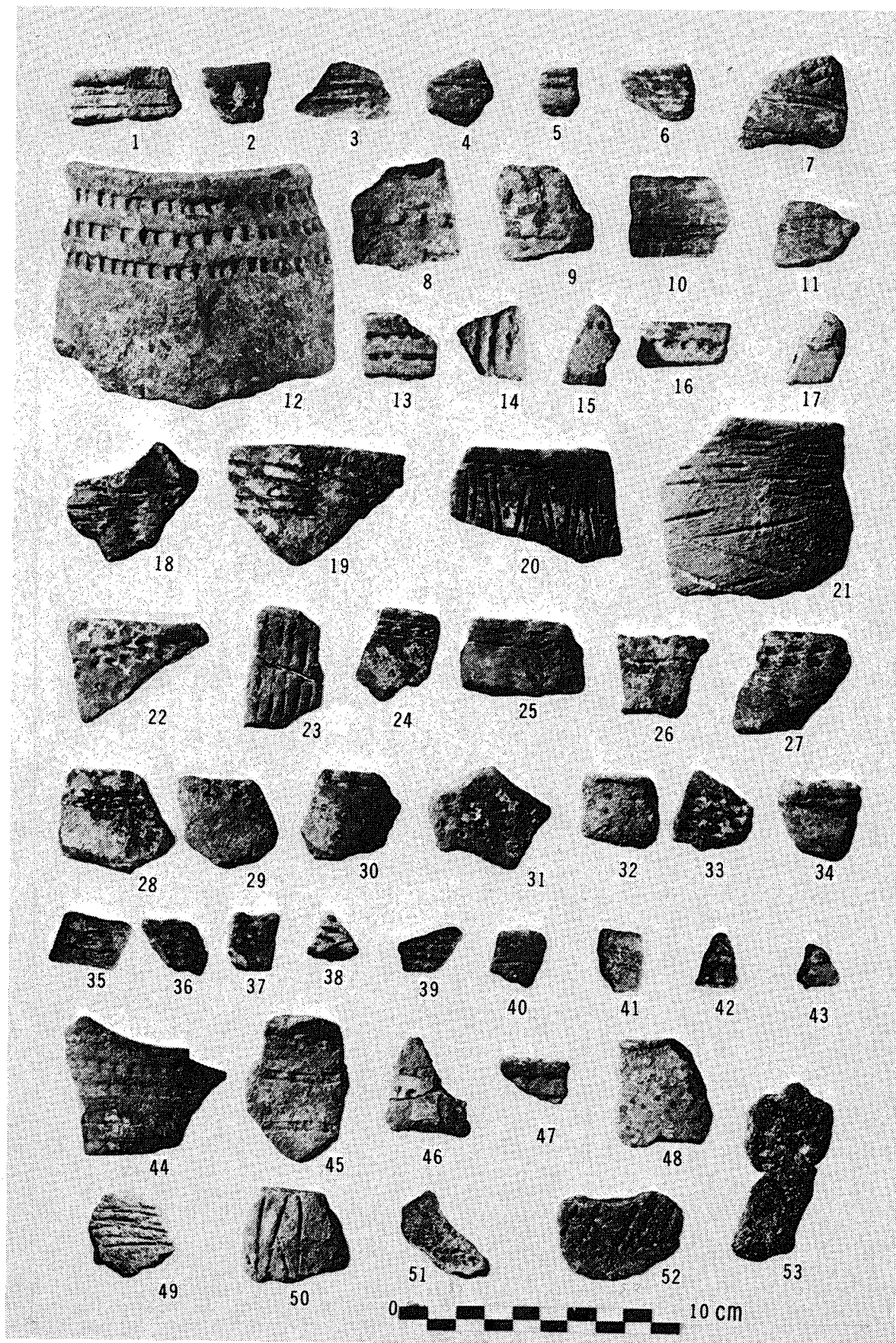
〔Ⅱ層30～40cm(1～18)、40～50cm(19～28)〕

ピットM-6

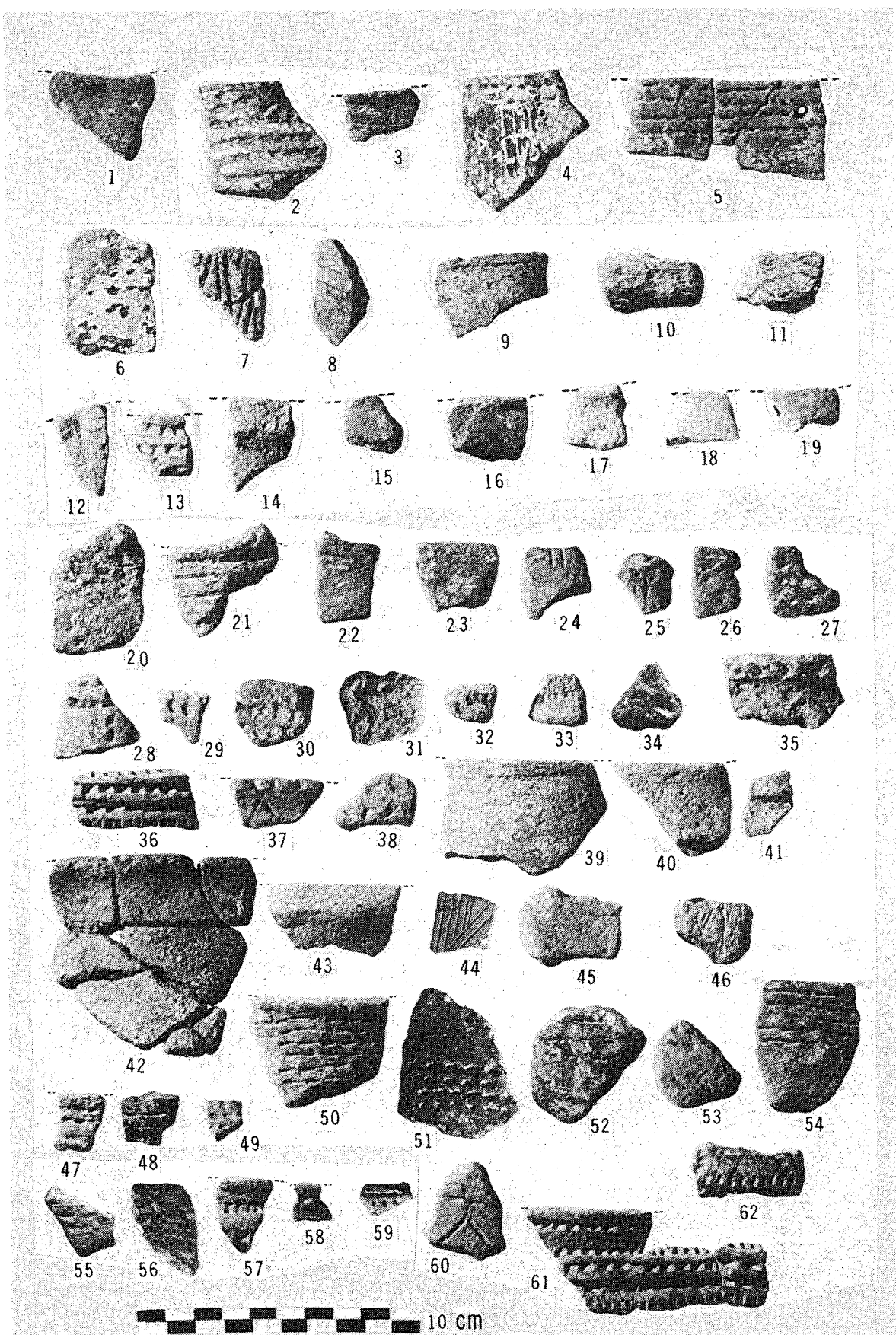
〔Ⅱ層0～10cm(29～52)、10～20cm(53～65)〕



図版 9 ピットM-6
〔II層20～30cm(1～43)、30～40cm(44～49)〕



図版10 ピットM-6
〔II層30~40cm(1~17)、40~50cm(18~53)〕

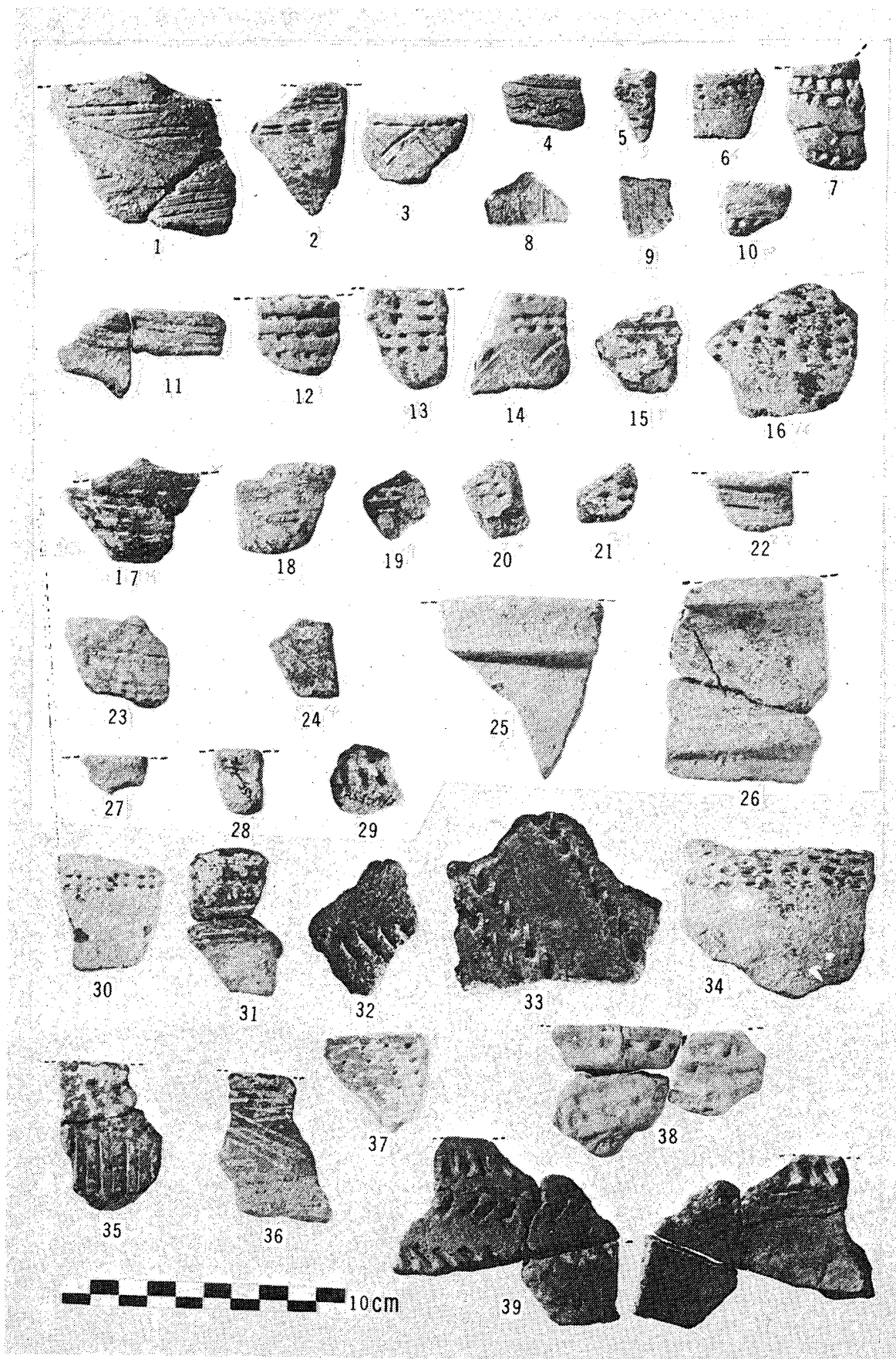


図版11 ピットM-6

〔Ⅱ層50～60cm(1～4)、Ⅲ層0～10cm(5～8)〕

ピットS-5

〔Ⅰ層(9～19)、Ⅱ層0～10cm(20～46)、20～30cm(47～61)〕



図版12 ピット S-5

〔Ⅲ層0～10cm(1～10)、10～20cm(11～29)、20～30cm(30～36)、30～40cm(37、38)、40～50cm(39)〕